16-17世紀オスマン朝下の東部アナトリアにおける
「ユルトルク＝オジャクルク」と「ヒュクーメト」の成立

Establishment of the *Yurtluk ve Ocaklık* and the
Hükûmet in Eastern Anatolia from the
16th to the 17th Century

齋 藤 久美子^{*}
SAITO Kumiko

ABSTRACT This paper analyzes the establishment by the Ottoman Empire of the *yurtluk ve ocaklık* and the *hükûmet* in eastern Anatolia and their historical development.

After the Ottoman Empire took the eastern Anatolia under its control in the 16th century, it examined the situation of the land tenure and the distribution among the power of Kurdish *amirs* (chieftain) who had governed the area. This was aimed at merging eastern Anatolia into its local administration system. Thereafter *amirs* received *sancaks* (subdivision of a province) as a *yurtluk ve ocaklık* (hereditary holding) which authorized them to keep inherited privileges. The Ottoman Empire called the *sancaks* of powerful *amirs* *eyalets* (semi-autonomous sancak), but the distinction remained vague. At the end of 16th century when the word *hükûmet* started to be commonly used instead of *eyalet*, the *sancaks* of powerful *amirs* were designated *hükûmets* accordingly. The establishment of the *hükûmet* played a decisive role in differentiating the more and less powerful *amirs* by naming them separately.

Hükûmet means the exemption from the land survey and the *timar* (fief) system, and where all the tax income belonged to the *amir*. The definition of *hükûmet* changed over time. In some *hükûmets* the privileges of *amirs* were gradually undermined. On the other hand, the *amirs* who ruled *hükûmets* remained powerful, obtaining the title of *han* (*khan*) instead of *bey* at the end of 17th century.

* 本学会会員

Member, The Society for Near Eastern Studies in Japan

The establishment of *hükûmet* exemplified the real nature of the Ottoman governing system. The Ottoman Empire introduced the Ottoman governing system, which embraced traditional political and social order into eastern Anatolia. In other words, the establishment of the *yurtluk ve ocaklık* and the *hükûmet* represents one aspect of the reconstitution of traditional order by the Ottoman Empire.

はじめに

本稿では、オスマン朝において地方行政・軍制・土地制度の根幹を成したディマル制のなかでの特殊な例として史料中にあらわれる「ユルトルク＝オジャクルク (*yurtluk ve ocaklık*)」と「ヒュクーメト (*hükümet*)」という2つの用語について検討する。

オスマン朝は、セリム1世とそれに続くスレイマン1世の時代にサファヴィー朝に対する遠征を遂行し、軍事的・経済的な要衝であった東部アナトリアをその版図に加えた。オスマン朝による東部アナトリアの征服は、16世紀初頭のディヤルバクル地方の征服と、16世紀中葉のヴァン地方の征服という2つの征服事業によって進められた。特に、ディヤルバクル地方の征服に際しては、クルド系の部族連合を統率するアミール（以下、クルド系アミール）たちの動向が重視され、クルド系アミールの既得権を認めたとうえで彼らをオスマン朝に臣従させ、対サファヴィー朝に向けた軍事協力をとりつけたことが、オスマン朝のディヤルバクル地方征服の要因の1つとなった。⁽¹⁾さらに、ヴァン地方の征服の際には、アミールの既得権を明示的に子々孫々にわたって認めることにより、アミールのオスマン朝への忠誠を維持させ、軍事的支援を引き出すことに成功した。⁽²⁾クルド系アミールの既得権とは、スレイマン1世が、941/1534年にクルド系アミールに送付したミルクナーメ (*mülknâme*, 土地の管理権に関する勅許状) に記載されているが、クルド系アミールが世襲の支配領域 (*eyâlet*) を、そこからの収入・収穫物も含め、子々孫々にわたり保有する権利のことであった。⁽³⁾そして、この既得権を総称したのがユルトルク＝オジャクルクという用語であると考えられる。

ユルトルク＝オジャクルクとヒュクーメトに関するこれまでの定説を整理すると以下ようになる。オスマン朝による東部アナトリアの征服の後、クルド

系アミールの領地は県に相当するサンジャク (sancak) としてオスマン朝の地方行政組織に編入され、県知事であるサンジャク・ベイ (sancak beği) に任命されたのはアミールの家系出身者であった。サンジャク・ベイであるクルド系アミールが死亡した場合は、その息子が次のサンジャク・ベイとして任命されていた。サンジャク・ベイ職の世襲である。そして、ディヤルバクルとヴァンの両州に属するサンジャクは、一般のサンジャク、クルドのサンジャク、ヒュクームトという3つに分類されていた。クルドのサンジャクとヒュクームトとは、基本的にウルトルク＝オジャクルクとしてクルド系アミールの一族に世襲的に授与されたサンジャクのことであるが、これまでの研究によれば、原則として、クルドのサンジャクでは検地が行われ、ヒュクームトでは検地が行われなかった。⁽⁴⁾

ウルトルク＝オジャクルクという用語については、ギョユンチ N. Göyünç が研究史をまとめたうえで、16世紀から17世紀にかけて東部アナトリアだけでなく、アラブ地域、中央アナトリア、バルカンにおいても、その地位が父から子へ世襲されるというオジャクルクまたはウルトルク＝オジャクルクとして任命されたサンジャク・ベイの例を紹介した。さらに、オジャク・ティマールと称する、16世紀にヌサイビンのサンジャク・ベイが、自身の支配領域であるオジャクからのティマール収入を息子に移譲した例を挙げた。⁽⁵⁾

クルチ O. Kılıç は、法令集であるカーヌーンナーメ (kānunnāme) で規定されたウルトルク＝オジャクルクとヒュクームトとされる条件が、実際にどのように適用されたかに着目し、任命時の状況（征服時のオスマン朝への服従と奉仕）、（中央による意図的な）任命と罷免が無いこと、ヒュクームトでの検地の不実施、ヒュクームトでのオスマン朝の官人やイエニチェリの不在、という4つの点について、史料中における用例を示して比較検討した。⁽⁶⁾ その結果、いずれの条件に関しても例外が認められ、ともすれば特異的な状態にあったとされるウルトルク＝オジャクルクとヒュクームトのサンジャクについて、実際は中央のコントロール下にあったと指摘した。

これまでの研究では、カーヌーンナーメで示されたウルトルク＝オジャクルクおよびヒュクームトとされたサンジャクの提示と、ウルトルク＝オジャクルクとヒュクームトとされるための条件の提示に終始することが多く、2つの術語の成立の時期と、その後の歴史的な展開について十分に触れられてこなかっ

た。そして、主として地方行政組織のなかで説明されてきたために、それ以外の、例えばティマール保有に関わるユルトルク＝オジャクルクについてはほとんど検討されておらず、東部アナトリアにおけるティマール体制について十分に解明されたとは言い難い。そこで、本稿では、東部アナトリアにおけるオスマン支配の構造を明らかにするための手がかりとして、クルド系アミールが管理したサンジャクに導入されたユルトルク＝オジャクルクとヒューメトについて、主として文書史料から用例を用いつつ体系的に検討する。

本稿で扱う東部アナトリアのクルド系アミールが管理したサンジャクとは、ペルテク Pertek, サクマン Şakmān, マズギルト Māzgird, エイル Eğil, パル Pālū, チェルミク Çermik, デルズィニー Derzîni, ギルディカン Girdikān, アタク Atāk, テルジル Tercil, チャパクチュル Çapākçür, ゲンジェ Gence, ハンジュク Hāncūk, クルプ Kulb, メファリキン Mefārikīn, ベスヤン・ブジュヤン・ズィラン Besyān ve Bucyān ve Zilān, ハッキヤリ Hakkāri, イマディエ ‘Imādiye, ジズレ Cizre, グルギル Gūrgil, ハゾ Hāzo, ヒザン Hızān, ミュキウス Müküs, イスパイルト İsbāyird, シルヴィー Şirvî, マフムーディー Maḥmūdî, ビトリス Bitlis の27のサンジャクを指す（地図参照）。なお、クルド系アミールが管理したサンジャクを総称して説明する際は、便宜上、クルド系のサンジャクと記す。

I. カーヌーンナーメにおけるユルトルク＝オジャクルクと ヒューメトの規定

はじめに、ユルトルク＝オジャクルクとヒューメトについて、これまでの研究で参考とされてきた2つのカーヌーンナーメにおけるその意味を確認してみよう。

オスマン朝による東部アナトリアの征服から約半世紀を経て、17世紀初頭に執筆されたアイン・アリー・エフェンディのカーヌーンナーメにおいては、クルドのサンジャクとヒューメトについて、以下のように説明する（〔 〕内は筆者による補足）。

クルドのベイたちのサンジャクは、〔オスマン朝の〕征服時にサンジャクとして〔クルド系アミールたちに〕与えられた。ユルトルク＝オジャクルク

として存在し、任命と罷免はなく、[サンジャク・ベイ] 死亡時には、州総督の上奏により、その息子に与えられ、よそ者には与えられない。収入・収穫物は台帳に記録され、サンジャクには[20,000アクチェ以上100,000アクチェ以下のティマル収入を意味する] ゼアーメトも存在する。遠征時にはゼアーメトとティマル保有者、およびアライ・ベイとともに他のサンジャク・ベイのごとく州総督のもとで従軍する。命令が発せられた任務に従事しなければ、そのサンジャクは息子または親戚に与えられる。ヒュクーメトでは検地は行なわれず、ゼアーメトもティマルも存在しない。ハーキム [=アミール] たちはミルキエト (mülkiyet) として保有する。⁽⁷⁾ 収入・収穫物はハーキムたちが保有する。

さらに、17世紀中葉に記されたいわゆるソフィヤル・アリー・チャウシュのカーヌーンナーメにおいては、クルドのサンジャクについては、

ユルトルク=オジャクルクも他のサンジャク・ベイのように太鼓と旗の持ち主である。確定した台帳付けのハスがあり、その手に皇帝陛下の勅許状が与えられた。アフドナーメ ('ahdnāme) に従い任命と罷免は認められない。サンジャクにはゼアーメトとティマルがある。遠征にはゼアーメト、⁽⁸⁾ ティマル保有者とともに州総督の下で従軍する。

とある。また、ヒュクーメトについては、

[オスマン朝の] 征服時に、奉仕と服従の対価として、[それまでの] 所有者たちに [ヒュクーメトを世襲的に管理する権利が] 付与され、ミルキエトとして保有する。その土地 (memleketleri) は記録されず、オスマン朝の役人の立ち入りもない。収入・収穫物も台帳に記録されない。ヒュクーメトにはオスマン朝の官人もイェニチェリも存在しない。すべては彼等自身に属する。アフドナーメに従い、今後、任命も罷免も認められない。すべては命令に拠っている。ほかのオスマン朝のサンジャク・ベイのように、⁽⁹⁾ どの州に属そうとも、州総督とともに遠征に従軍する。

とある。

本章では、これまでの研究で参考とされてきた2つのカーヌーンナーメにおけるユルトルク＝オジャクルクとヒククーメトの定義を確認することを目的とした。それによると、クルドのサンジャクとヒククーメトは、クルド系アミールの一族による世襲的な管理が認められたうえで、ユルトルク＝オジャクルクとして授与されていたことが確認できる。特に、ヒククーメトはミルキエトとして保有されていた。ミルキエトとは、検地の不実施によりティマール制が施行されず、さらにオスマン朝の役人の立ち入りもなく、ヒククーメトの税収の徴税権をアミールが保有したことを意味した⁽¹⁰⁾。

そして、先行研究ですでに指摘されていた通り、2つのカーヌーンナーメによると、検地がなされるか否かでクルドのサンジャクとヒククーメトの区別がなされていた。検地が行われティマール制が施行されたのがクルドのサンジャクであり、検地が行われずティマール制が施行されなかったのがヒククーメトであった。

II. ユルトルク＝オジャクルクの再定義

本章では、上に提示したカーヌーンナーメでの定義を受けて、実際の史料中に現れるユルトルク＝オジャクルクの用例を分析しつつ、ユルトルク＝オジャクルクの再定義をこころみる。クルド系のサンジャクに関して使用されたユルトルク＝オジャクルクという用語は、サンジャクの世襲的な管理のほか、ティマールの世襲的な保有と部族の管理という3つのパターンにおいてその事例を確認することができる。以下、順を追ってユルトルク＝オジャクルクに関する事例について見ていこう。

1. サンジャクの世襲的な管理

まずは、サンジャクの世襲的な管理に関する事例からである。1036/1627年、ヒザンのアミール、ハサン・ベイ *Hasan Beğ* がヴァンの防衛任務に従事しないとして、ヒザンはいとこのアブダル・ベイ *Abdāl Beğ* に授与された。しかし、5ヶ月後に、「[ヒザンは] 39年来 [ハサン・ベイが保有してきた] 先祖代々のオジャクルクであり、亡きスルタン・スレイマン・ハーンの勅許状 (*berāt*) を所持するハサン・ベイ」に再び与えられた⁽¹¹⁾。命令された任務に従事せず解任す

ることは、アイン・アリー・エフェンディのカーヌーンナーメによれば当然のことであるが、このケースは、ハサン・ベイとアブダル・ベイのいずれが支配の正当性を有しているかに問題がすり替えられた。つまり、カーヌーンナーメの規定は必ず遵守されていたわけではなく、それよりも、実際に勅許状を所有した者が支配の正当性をより強く主張できる立場にあったのである。そして、すでに指摘されてきた通り、アミールの家系出身者がサンジャクを世襲的に管理することをオジャクルクと呼んでいたことが確認できる。

次に、支配領域を意味するウルケ (ülke), ユルト (yurt), オジャク (ocak) の事例について見てみよう。これまでは、ユルトとオジャクという2つの用語が注目されてきたが、次の事例から、実際にはウルケという用語もユルトとオジャクの同義語として使用されたいことがわかる。[[974/1566年] 以前, シルヴィーのウルケは2つのサンジャクに分割され, 半分はミール・ハサン Mir Hasan に, もう半分はアブダル・ベイ Abdāl Beğ の息子のマフムト Maḥmūd に与えられた⁽¹²⁾], [[971/1564年] [マフムディーのアミール, ハサン・ベイ Ḥasan Beğ の] 死亡時, ユルトとオジャクである彼のウルケは息子のイヴァズ⁽¹³⁾ 'İvaz に授与されるよう上奏]とあるように, ウルケはユルトとオジャクと同様に, アミールの一族により世襲的に管理される支配領域を指していた。

最後に、ユルトルク、オジャクルクに加えて、ウルケリキ (ülkelik) の用例について見てみよう。985/1577年、サファヴィー朝に亡命していたビトリスのアミールの子孫、シェレフ・ハーン Şeref Hân がビトリスに帰還する件について、ヴァン州総督に送られた勅令の中に、「シェレフ・ハーンの父親のウルケをユルトルク＝オジャクルクとして」⁽¹⁴⁾ シェレフ・ハーンに与えるという記載があるが、これ以外にも「[100,000アクチェ以上のティマール収入を意味する] ハスとともにビトリス・サンジャクをウルケリキとして」⁽¹⁵⁾ 授与されたという記述がある。ウルケがユルトやオジャクと同義語であるように、ウルケリキもまた、ユルトルクやオジャクルクと同様の意味を有したのである。

以上を整理すると、ウルケ、ユルト、オジャクは同じ意味を持つが、アミールにより世襲的に保有される支配領域を指していた。そして、アミールが自身の支配領域をサンジャク・ベイとして管理することをウルケリキ、ユルトルク、オジャクルクと呼んでいた。

2. ティマールの世襲的な保有

次に、これまで詳細に分析されることのなかったティマールの世襲的な保有に関する事例を見てみよう。マフムーディーのアミール、ハサン・ベイが、自身の二人の息子が保有するティマールの加増に関して行った上奏に、
「[961/1554年] ハサン・ベイの息子で、彼のオジャクから15,000アクチェのティマールを保有するシルヴィー Şirvi」と「ハサン・ベイの息子で、彼の部族 (‘aşiret) とオジャクから15,000アクチェのティマールを保有するイヴァズ (16) İvaž」という記述がある。ハサン・ベイの息子たちは父親のオジャクのなかにティマールを保有していたことがわかる。

そして、「[973/1566年] ゲンジェ・サンジャクでユルトルク＝オジャクルク (17) としてゼアーメトを保有するオメル・アガ ‘Ömer Ağa」, 「[988/1580年] マフムーディー・サンジャクにあるアク・ハサン Ak Hasan 村をオジャクルクとしてゼアーメトで保有するアブダル Abdāl が死去し、ゼアーメトが空になったため、兄弟のイブラヒム İbrahim に授与されるよう上奏がなされたので、いにしえからのユルトとオジャクが [イブラヒムに] 授与されるよう決定 (18) 」など、以上の例から、クルド系のサンジャクにおけるティマール保有に関しても、ユルトルク＝オジャクルクという用語が使われていることがわかる。さらには、のちにヒューメトとされたゲンジェとマフムーディーでもティマールが分配されていたことが確認できる。

以上から、ティマール保有に関するユルトルク＝オジャクルクとは、クルド系のサンジャクにおけるティマール地の世襲的な管理権を意味した。

旧来から世襲されてきたティマールでなくてもオジャクルクと呼ぶ場合があった。代表的な例として、テルジル・サンジャクにあるスルタンのハスが、マフムーディーのアミール、ハサン・ベイにオジャクルクとして移譲されたケース (19) がある。ハサン・ベイにオジャクルクとして授与されたティマール地は、この後、マフムーディーのアミールの一族により世襲的に保有されていった。このことから、ティマールが世襲的に保有されていたか否か、またその保有の経緯に関わらず、中央によりユルトルク＝オジャクルクとして認定されることが重要であったことがわかる。

3. 部族の管理

最後に、これまで言及されることのなかった、部族からの税収もアミールのウルケの一部と見なされていたことを示す事例をあげよう。[[973/1566年] エイルのアミール、カスム Kāsim は、ウルケとして保有する部族 (‘aṣīret) をいにしえから今日まで管理しており、[部族が] 台帳に記載されていないことを知らせ、この件について勅令を要請したので、以下のように決定された。上述の者の部族は台帳に記載されておらず、[カスムが] ウルケリキとして保有しているので、[誰も] 台帳に記録のない者たちに介入しないように⁽²⁰⁾。この事例はかなり省略して曖昧に記載されているが、エイルのアミールたちが長い間ウルケとして管理してきた部族が台帳に記載されていないが、誰もこの部族に介入しないように、という決定がなされたと理解できる。アミールが管理する部族もアミールのウルケとして捉えられていたわけであるが、より正確には、部族からの税収がアミールのウルケとされていたのだらうと思われる。

以上、ユルトルク＝オジャクルクについて本章から明らかになった点を、2つのカーヌーンナーメでの規定に加えて再定義すると、ウルケ、ユルト、オジャクは同じ意味を持つが、アミールの一族が世襲的に保有した既得権（＝支配領域とそれに関連して発生する税収の徴税権）を指した。そして、アミールが世襲的に既得権を管理することをウルケリキ、ユルトルク、オジャクルクと呼んでいた。アミールの支配領域内には個々のオジャクの村やメズラア (mezra‘a, 村に属する耕作地) が存在し、そこからの税収の徴税権はアミールの一族や配下の者にも世襲的なティマールとして分配されていたが、このようなアミールの支配領域内での世襲的なティマールの保有についてもウルケリキ、ユルトルク、オジャクルクという言葉が適用されていた。それに加えて、オジャクは、オスマン朝への編入後に、オジャクルクとして授与された元来アミールとは関係のないティマール地をも含んでいた。

III. ヒュクーメトの成立と展開

本章では、前述のカーヌーンナーメに規定があるように、原則として検地が実施されずティマール制も施行されない、という特権を認められたヒュクーメトについて分析する。ヒュクーメトを表わす語として、史料中、一般的な意味

を持つサンジャク以外にエヤーレト (eyālet) が使用された。一例として、995/1587年のハッキヤリのサンジャク・ベイ任命に関する史料では、ヒューメトとエヤーレトという語が並用されていて、エヤーレトがヒューメトに代替しう⁽²¹⁾る語として使用されていたことがわかる。それでは、エヤーレトという言葉から見ていこう。

1. エヤーレトからヒューメトへ

オスマン朝によるディヤルバクル地方の征服の後、クルド系アミールの領地はサンジャクとしてオスマン朝の地方行政組織に編入されたが、これらのサンジャクの一部は、一般のサンジャクを意味するリヴァー (livā) ではなく、エヤーレトとして記載された。

それではまず、エヤーレトがどのサンジャクを指していたのか見てみよう。例えば、932/1527年にはすでに、チェミシュゲゼク (のちにペルテク、サクマン、マズギルトに分割)、エイル、パル、チェルミク、デルズィニー、アタク、チャパクチュル、ハッキヤリ、イマディエ、ジズレ、ハゾ、ヒザン、ビトリス、という一部のクルド系のサンジャクにエヤーレトという用語が使用されていた。⁽²²⁾次に、951/1545年にエヤーレトとされたのは、エイル、パル、ゲンジェ、チャパクチュル、イマディエ、ジズレ、ハゾ、ヒザンの8つのサンジャクであった。⁽²³⁾そして、955/1548年から963/1555年の間にエヤーレトとされたのは、エイル、パル、デルズィニー、チャパクチュル、ゲンジェ、クルブ、イマディエ、ジズレ、ハゾ、ヒザンの10のサンジャクであった。⁽²⁴⁾ただし、ゲンジェについては、史料中のリストではエヤーレトに分類されているが、その後の個別の記述ではリヴァーとされた。さらに、963/1556年から994/1586年の間にエヤーレトとされたのは、エイル、パル、デルズィニー、ギルディカン、ゲンジェ、クルブ、イマディエ、ジズレ、ハゾの9つのサンジャクであった。⁽²⁵⁾これらのサンジャク以外にエヤーレトとされたのは、987/1579年のビトリス、989/1581年のベスヤン・ブジュヤン・ズィラン、⁽²⁶⁾1001/1593年のハッキヤリであった。⁽²⁷⁾つまり、エヤーレトと称されたサンジャクは、チェミシュゲゼク、エイル、パル、チェルミク、デルズィニー、ギルディカン、アタク、チャパクチュル、ゲンジェ、クルブ、ベスヤン・ブジュヤン・ズィラン、ハッキヤリ、イマディエ、ジズレ、ハゾ、ヒザン、ビトリス、という計17のサンジャクであったが、その範囲は時

代により曖昧であった。

エヤーレトという言葉は、サンジャクを示す語としては、文書史料では1004/1595年以降は使用されなくなった。サンジャクを示す語としてのエヤーレトが使われなくなるのときを前後して、ヒククーメトという言葉が多用されはじめた。⁽²⁹⁾文書史料におけるヒククーメトの初出は、管見の限りでは962/1554年であるが、⁽³⁰⁾頻用されるようになるのは1001/1592-3年頃からである。また、エヤーレトに代わりヒククーメトが多用され始めた頃は、州を表わす語がヴィラーエト (vilāyet) からエヤーレトへと変化する時期にあたっていた。⁽³¹⁾ヒククーメトの分類については冒頭で挙げた2つのカーヌーンナーメにおいても異なるが、ヒククーメトとされたのは、エイル、パル、テルジル、ゲンジェ、ハッキヤリ、イマディエ、ジズレ、ハゾ、ヒザン、マフムーディー、ビトリスの11のサンジャクであり、17世紀末までヒククーメトの範囲は変ることはなかった。⁽³²⁾

オスマン朝が、クルド系のサンジャクをリヴァーとエヤーレト、のちにはリヴァーとヒククーメトに分けて区別した理由として、アミールの支配領域を地方行政組織に編入するにあたり、アミールの領地支配の実態とその勢力バランスを把握しようとしたことが考えられる。当初、一部のクルド系のサンジャクを、一般のサンジャクを示すリヴァーではなく、エヤーレトという言葉で表し区別したが、エヤーレトの範囲は比較的曖昧なままであった。しかし、16世紀末に、エヤーレトに代わりヒククーメトという言葉が多用され始めると、ヒククーメトとされるサンジャクは徐々に固定化されていった。ヒククーメトでは検地が実施されず、ティマール制も施行されない、さらには、一切の税収もアミールが保有するという特徴が示すように、⁽³³⁾ヒククーメトとされたのは勢力あるアミールが管理したサンジャクであった。以上から、エヤーレトを経てヒククーメトが成立した背景には、クルド系のサンジャクをリヴァーとヒククーメトに分け、さらに、ヒククーメトに一定の特権を認めることでほかのサンジャクとの差別化を進めるというオスマン朝の政策があったといえる。

2. ハーンと呼ばれたクルド系アミール

16世紀末から17世紀前半にかけて、一部のクルド系のサンジャクについてヒククーメトという分類が確定した後、17世紀末に、一部のクルド系アミールの称号がベイ (beğ) からハーン (hān) へと変化した。オスマン朝では、スルタン

表1 ハーンと呼ばれたクルド系アミール（ビトリスを除く）

ヒュクームト 名	アミール名	ハーンと記載され た年号（ヒジュラ 暦／西暦）	典拠文書史料
エイル	ムスタファ・ハーン Muṣṭafā Ḥān	1109/1698	MD 110:1258, 275
	セイイト・ハーン Seyyid Ḥān	1110/1699	MD 110:2995, 651
バル	ハ rilル・ハーン Ḥalil Ḥān	1112/1700	MD 111:1264, 373
テルジル	ハイダル・ハーン Ḥaydar Ḥān	1109/1698	A.RSK 1551, 133
			MD 110:1258, 275
		1110/1699	MD 110:3000, 651
		1112/1700	MD 111:1263, 373
ゲンジェ	アリー・ハーン ‘Alī Ḥān	1109/1697	MD 110:784, 172
		1109/1698	MD 110:1258, 275
		1110/1699	MD 110:3001, 651
		1112/1700	MD 111:1265, 373
ハッキヤリ	シェレフ・ハーン Şeref Ḥān	1040/1630-1	K.K. 266, 98
		ca.1043/1633-4	Cev., Dahiliye 6095, 9
	ゼイネル・ハーン Zeynel Ḥān	1049/1639	K.K. 266, 98
	イブラヒム・ハーン İbrāhīm Ḥān	1112/1700	MD 111:1285, 375
イマディエ	オスマン・ハーン ‘Osmān Ḥān	1109/1698	MD 110:1578, 359
		1112/1700	MD 111:1284, 375
		1112/1700	MD 111:1373, 400
ジズレ	アブダル・ハーン Abdāl Ḥān	1075/1664-5	MD 95:281, 47
	アブドゥッラー・ハーン ‘Abdullāh Ḥān	1104/1692	MD 104:477, 107
		1106/1694	MD 105:119, 34
		1109/1698	MD 110:1302, 285
		1111/1700	MD 111:1005, 282
		1112/1700	MD 111:1266, 373
		1114/1702	A.RSK 1551, 133
		1109/1697	MD 110:811, 175
	シェレフ・ハーン Şeref Ḥān	1111/1700	MD 111:839, 242
		1113/1701	MD 111:2012, 572
ハゾ	ムラト・ハーン Murād Ḥān	1097/1686	A.DVN.MHM 944, 1
		1104/1692-3	MD 104:477, 107
		1106/1694	MD 105:119, 34
		1109/1698	MD 110:1302, 285
		1110/1699	MD 110:2996, 651
		1111/1700	MD 111:838, 242
		1112/1700	MD 111:1262, 373
		1113/1701	MD 111:2008, 572
	マフムト・ハーン Maḥmūd Ḥān	1109/1697	MD 110:810, 175
ヒザン	シェレフ・ハーン Şeref Ḥān	1101/1690	MD 99:362, 114

とクリム・ハーン以外にはそれまで使われることが稀であったと考えられるハーンの称号であるが、ビトリスのアミールに関しては、シェレフ・ハーンがサファヴィー朝でハーンと呼ばれていたこともあり、オスマン朝でもハーンの称号が使用され続けた。しかし、17世紀末まで、文書史料中、ビトリス以外のアミールでハーンと呼ばれた者はいなかった。ところが、1040/1630-1年と1043/1633-4年頃のハッキヤリと1075/1664-5年のジズレのケースを先駆として、17世紀末に、ベイからハーンへと一部のアミールの称号の変遷が見られた。⁽³⁴⁾ただし、すべての史料で常にハーンと記されたわけではなかった。文書史料中、ハーンと呼ばれたのは、(表1)にあるように、エイル、パル、テルジル、ゲンジェ、ハッキヤリ、イマディエ、ジズレ、ハゾ、ヒザンの15人のアミールであり、これらはすべてヒククーメトを管理したアミールであった。同じくヒククーメトとされたマフムーディーのアミールがハーンと呼ばれたかについてであるが、1054/1644年以降のアミールの情報がないため知ることができない。ビトリスのアミールにはじまったハーンの称号の使用は、まずは大きな勢力を誇ったとされるハッキヤリ、ジズレに、その後、他のアミールの家系にも適用されていたと考えられる。

エヤーレトとされたサンジャクが年代により異なっていたのに対し、ヒククーメトとされたサンジャクはほぼ変わることがなかった。17世紀前半までに確定したヒククーメトはその後に変化することはなく、ヒククーメトを管理したアミールは、17世紀末にはハーンと呼ばれていたのである。

3. ヒククーメトの定義の変遷

アイン・アリー・エフェンディのカーヌーンナーメによると、クルドのサンジャクとヒククーメトの違いは検地の実施の有無に拠っていた。17世紀初頭に記されたアイン・アリー・エフェンディのカーヌーンナーメは、実際はヒククーメトの定義が確定し始めた16世紀末頃の状況を記したものと考えられるが、⁽³⁵⁾それでは、その後、ヒククーメトの定義はどのように変化したのだろうか。

はじめに、1026/1617年のテルジルの例を示そう。「テルジル・サンジャクは、いにしえからのヒククーメトではなく、サンジャクであったため、検地の際に異教徒のジズヤ (jizya, トルコ語ではジズイェ cizye) が国庫収入のために記録された。しかし、策を講じてヒククーメトとさせて、数年来、異教徒のジズ

やを納めていない」⁽³⁶⁾とある。テルジルは本来はヒューメトでなかったが、この時期に、何らかの方法によりヒューメトとなったことが明記されている。そして、ヒューメトとなったテルジルのアミールが、ジズヤを国庫に送付しなくなったことも記されている。アイン・アリー・エフェンディのカーヌーン・ナメでの規定のように、ヒューメトでは検地は行なわれず、一切の税収はアミールが保有することになっていたため、新たにヒューメトとなったテルジルのジズヤもまた、テルジルのアミールの収入と見なされたのであろう。

しかし、クルチがヒューメトの定義には例外が存在すると述べたように、ジズヤに関しても例外があった。例えば、ビトリスではジズヤの徴収が行われた。ビトリスに加えて、ハッキヤリにおいても、飛び地であるヴァスタンでジズヤの徴収が行なわれた。そして、ビトリスとヴァスタンで徴収されるジズヤは、17世紀前半に、ヴァン城塞 (kal'e) の守備隊に支給される俸給のための特定財源に指定された。⁽³⁷⁾さらに、16世紀後半に、ジズレでアミール位をめぐる権力争いが勃発した時、アミールは自らの支配の正当性を保証してもらう代わりに、ジズレに属する一部の村をスルタンのハスとすることを認めたが、17世紀末に、このジズレにあるスルタンのハス地からの税収もヴァン城塞の守備隊の俸給に指定された。⁽³⁸⁾

このように、ヒューメトの定義は、その時の政治・財政状況により変化していった。そして、16世紀末から17世紀を通じて、ヒューメトを管理したアミールがその勢力を誇った一方で、一部のヒューメトにおいて検地が実施されたり、スルタンのハスが設定されたり、ジズヤが徴収されたりと、徐々にではあるが、アミールの既得権が切り崩されていったことが明らかになった。

おわりに

本稿では、従来、体系的な検討が十分に行われてこなかった主題の1つであり、東部アナトリアの特性を表わしたユルトルク＝オジャクルクとヒューメトという用語について、出来るだけ広く関係史料を用いつつ検討した。ユルトルク＝オジャクルクとは、クルド系アミールが自身の世襲的な支配領域をサンジャク・ベイとして管轄すること、そして、クルド系のサンジャクにおける世襲的な土地の管理権をティマールとして保有することを意味した。ただし、世襲的な保有が必ずしもユルトルク＝オジャクルクとされる条件であったわけで

はなく、中央により認証されることが重要であった。そして、ヒューメトとは、アミールたちの差別化を図った結果生み出された用語であり、エイル、パール、テルジル、ゲンジェ、ハッキヤリ、イマディエ、ジズレ、ハゾ、ヒザン、マフムーディー、ピトリス、という11のサンジャクを指し示していた。オスマン朝は、当初、一部のクルド系のサンジャクをエヤーレトとして区別したが、その範囲は曖昧なままであった。しかし、エヤーレトに代わりヒューメトが多用され始めると、ヒューメトとされるサンジャクは固定化していった。ヒューメトが一定の特権を認められたサンジャクを意味したことを考慮するならば、ヒューメトの成立はクルド系のサンジャクの間での差別化を決定づけたといえよう。

また、ユルトルク＝オジャクルクとヒューメトはオスマン支配の本質を表わすものでもあった。オスマン朝は、征服地の慣習や秩序を部分的に残しつつ、体制内に組み込んでいったことが知られているが、それは東部アナトリアの征服に際しても同様であったと考えられる。⁽³⁹⁾オスマン朝は、東部アナトリアのクルド系アミールの領地を体制内に編入するために、同地域の政治・社会秩序をユルトルク＝オジャクルクおよびヒューメトという用語に置き換え、ティマール制のなかの特殊な例として統合していこうとした。言い換えるならば、東部アナトリアにおけるユルトルク＝オジャクルクとヒューメトの成立は、同地域における伝統的秩序のオスマン朝による再構築の一側面であった。本稿は、東部アナトリアのクルド系のサンジャクに導入されたユルトルク＝オジャクルクとヒューメトについて検討したが、同地域におけるティマール体制の構造については分析が及ばなかった。これについては稿を改めて論じることとした。

史料に関する略号

総理府オスマン文書館 (Başbakanlık Osmanlı Arşivi) 所蔵史料

A. DVN. MHM	Bâb-ı Âsâfi Mühimme Defterleri
A. RSK	Bâb-ı Âsâfi Ru'ûs Defterleri
Cev.	Cevdet Tasnifi
K. K.	Kâmil Kepeci Tasnifi Defterleri
MAD	Maliye'den Müdevver Defterler Tasnifi

* RD にはもともと頁番号がないが、台帳1冊の頁数が1000頁を超えることが多いため、本稿では筆者による任意的な頁番号を記した。

注

* 本稿ではアラビア文字の原綴りに即して転写したが、トルコ語の場合は音韻に従った。人名・地名のカタカナ表記についてはトルコ語の音韻に従った。

(1) 拙稿「16世紀初頭のオスマン朝によるディヤルバクル征服」『史学雑誌』109:8 (2000), 60-86.

(2) ヴェン地方の征服におけるオスマン朝のクルド政策については、2005年に東京大学に提出した博士論文「16-17世紀東部アナトリアにおけるオスマン支配の構造——征服と定着——」の第2章で考察した。

(3) トプカプ宮殿博物館附属文書館 (Topkapı Sarayı Müzesi Arşivi, 以下 TSA と略), E11969. N. Sevgen, *Doğu ve Güneydoğu Anadolu'da Türk Beylikleri: Osmanlı Belgeleri ile Kürt Türkleri Tarihi*, ed. by Ş. K. Seferoğlu & H. K. Türközü, Ankara, 1982, 42-43 と巻末に史料の複写版と抄訳が付されている。

(4) B. Kodaman, “Osmanlı Devrinde Doğu Anadolu'nun İdâri Durumu,” *Ondokuz Mayıs Üniversitesi Eğitim Fakültesi Dergisi* 1 (1986), 3-20.

(5) N. Göyünç, “Yurtluk-Ocaklık Deyimleri Hakkında,” in *Prof. Dr. Bekir Kütükoğlu'na Armağan*, İstanbul, 1991, 269-278.

(6) O. Kılıç, “Yurtluk-Ocaklık ve Hükümet Sancaklar Üzerine Bazı Tesbitler,” *OTAM* 10 (1999), 119-137.

(7) ‘Ayn ‘Alî Efendi, *Ḳavānîn-i Âl-i ‘Osmân der Hulâşa-i Mezâmîn-i Defter-i Divân*, İstanbul, 1280 A. H., reprinted with Preface by M. T. Gökbilgin, 1979, 29-30.

(8) *Sofyalî Ali Çavuş Kanunnâmesi: Osmanlı İmparatorluğu'nda Toprak Tasarruf Sistemi'nin Hukukî ve Mâlî Müeyyede ve Mükellefiyetleri*, ed. by M. Sertoğlu, İstanbul, 1992, 32. カルナーンナメにある皇帝陛下のアフドナーメとは、前注3で言及したミュルクナーメのことである。

(9) *ibid.*, 19.

(10) M. A. Ünal, “XVI. Yüzyılda Palu Hükûmeti,” *XI. Türk Tarihi Kongresi* (5-9 Eylül 1990) *Bildirî*, Vol. 3, Ankara, 1994, 1071-1096 でも、ミュルクイエトとして与えられたのは土地そのものではなく、徴税権であると述べられている。

(11) A. RSK 1496, 16.

(12) RD 17/1, 685.

(13) K. K. 218, 121.

- (14) MD 32 : 659, 363-364.
- (15) MD 32 : 506, 276; MD 32 : 514, 281; MD 32 : 543, 297.
- (16) MD 1 : 115, 30.
- (17) RD 17/1, 44.
- (18) K. K. 238, 42.
- (19) K. K. 175, 34b.
- (20) RD 17/1, 25.
- (21) K. K. 249, 179.
- (22) TSA, D5246. I. M. Kunt, *The Sultan's Servants: The Transformation of Ottoman Provincial Government 1550-1650*, New York, 1983, 114-115 に史料の複写版が付き
れており、本稿ではこれを利用した。
- (23) H. Sahillioğlu (ed.), *Topkapı Sarayı Arşivi H. 951-952 Tarihli ve E-12321 Numaralı Mühimme Defteri*, İstanbul, 2002, 154-155.
- (24) A. RSK 1452, 223-343. この A. RSK 1452 と分類されたいわゆるサンジャク任命
台帳は、*Belgeler* 誌で全頁の複写と転写付きで紹介された (F. M. Emecen & İ. Şahin,
“Osmanlı Taşra Teşkilâtının Kaynaklarından 957-958 (1550-1551) Tarihli Sancak
Tevcih Defteri I,” *Belgeler* 19 : 23 (1998), 53-121)。
- (25) K. K. 262, 108-191.
- (26) K. K. 236, 50.
- (27) MD 46 : 416, 197.
- (28) MD 70 : 159, 310.
- (29) 先行研究に依拠しつつ、16世紀中葉から17世紀前半までのディヤルバクル州の行
政区分の変遷を論じた M. van Bruinessen, “The Ottoman Conquest of Diyarbekir
and the Administrative Organisation of the Province in the 16th and 17th Centuries,”
in *Evlîya Çelebi in Diyarbekir, The Relevant Section of the Seyahatname*, Edited with
Translation, Commentary and Introduction by M. van Bruinessen & H. Boeschoten,
Leiden, 1988, 18-19 で示された表からも、エヤーレトからヒュクーメトへの変遷の過
程が確認できる。
- (30) K. K. 213, 117.
- (31) エヤーレトは州という行政単位を表わす語の1つとしても使われた。16世紀前半
には州という行政単位にはヴィラーイエトという語が使われていたのが、16世紀後半
からエヤーレトも使用されるようになり、17世紀にはエヤーレトが多用されるよう
になった。この点について詳しくは別稿で論じる予定である。
- (32) アイン・アリー・エフェンディのカーヌーンナーメでヒュクーメトとされたのは、
エイル、バル、ゲンジェ、ジズレ、ハゾ、イマディエ、ビトリスの7つのサンジャク
である。これ以外のヒュクーメトの初出は、1001/1593年のハッキヤリ (K. K. 253,
157), 1019/1610年のマフムーディー (A. RSK 1481, 95), 1026/1617年のテルジル

(MAD 5712, 26-27), 1036/1627年のヒザン (A. RSK 1496, 16) である。このほか、アタクとシルヴィーもヒュクーメトと記載されたことがあった。ただし、アタクは一度だけであり (K. K. 136, 17), シルヴィーは1025.1.27/1616.2.15と1025.2.1/1616.2.19という日付の近い2つの用例しか確認できなかったためヒュクーメトには入れなかった (MD 81 : 320, 146; MD 81 : 5, 3)。

(33) 例外的にビトリスでは検地が行われたが、それは、ビトリスのアミールの家系出身者がサファヴィー朝に亡命していて、ビトリスにアミールが不在の時であった。その後、ムラト3世の治世に、アミールの家系出身者であるシェレフ・ハーンがビトリスに帰還した後も、すでにティマル制が施行されていたビトリスでは数回検地が行われた。ビトリスに関する検地台帳は、少なくとも、総理府オスマン文書館に4冊 (所蔵番号 189, 208, 413, 730), 地券・地籍簿総局に8冊 (所蔵番号 109, 198, 202, 288, 328, 332, 341, 343) 所蔵されている。このほか、ビトリスと同様にヒュクーメトとされたゲンジェとマフムーディーでもティマル授与が行われていた。

(34) 17世紀中葉に東部アナトリアを訪れたエヴリヤ・チュレビは、ハッキヤリ、イマディエ、ジズレ、ビトリスのアミールについて、彼らがアッバース家の血筋を引く者たちであるとしてハーンと呼んだ (Evliya Çelebi b. Derviş Mehmed Zillî, *Evliya Çelebi Seyahatnamesi IV. Kitap: Topkapı Sarayı Bağdat 305 Yazmasının Transkripsiyonu-Dizini*, ed. by Y. Dağlı & S. A. Kahraman, İstanbul, 2001, 322)。

(35) 例えば、キャルキャル・サンジャクとミュキュス・サンジャクは、Livā-i Kārkār ma'a Mükütis のように、1つのサンジャクとして記載されている ('Ayn 'Alī Efendi, *op. cit.*, 33)。この2つのサンジャクは本来1つのサンジャクであったが、内紛により、963/1556年に2つのサンジャクに分割された (RD 67, 397-398)。その後、990/1582年頃に、一時的ではあるが、2つのサンジャクは再び1つのサンジャクに統合された (K. K. 239, 358)。しかし、キャルキャルは、993/1585年には再び独立したサンジャクとなった (MD 56 : 41, 12)。このことから、アイン・アリー・エフェンディのカーヌーンナメにおける地方行政組織に関する内容は、990/1582年から993/1585年頃の状態を反映していると考えられる。

(36) MAD 5712, 26-27. テルジルがヒュクーメトとなった日付については、具体的に特定できる史料が残されていない。1005/1596-7年頃にサンジャク・ベイに任命されたオメル・ベイ 'Ömer Beğ' にはヒュクーメトではなくリヴァーとして授与されたが、1019/1611年のイブラヒム・ベイ İbrāhīm Beğ の時代にはヒュクーメトと記された (K. K. 169, 77; RD 195, 20)。

(37) MAD 4659, 11; MAD 3260, 112.

(38) MAD 9879, 462-463.

(39) 前注2で示した博士論文の第3章から第5章で考察した。

地図 東部アリトリア